



創世記1章から11章をどう読むか ～次世代への信仰継承のために～

開催日時：2018年3月24日(土) 10時～16時

講師：高橋 清(CRJ会長、創造論宣教師)
宮本 武典(CRJ理事、日本女子大学理学部教授)

証：佐久間 一枝(CRJ理事、主婦)

参加費：無料(席上献金あり)

会場：胡屋バプテスト教会(沖縄県沖縄市胡屋6-2-1)



次世代の信仰を揺るぎないものに育てていくためには、聖書ははじめからおわりまで、偽りのない真実の書であると伝え、子ども自身に、聖書への確信をもたせることがとても重要です。

今回のセミナーでは、創世記1章から11章までをどう読むかを、3人の講師が、それぞれの視点で語り、グループディスカッションを通して深めていきます。

次世代にどのように信仰を継承していくかを、共に学び、考える機会になればと願っています。

ぜひ、祈りと期待をもってご参加ください。

皆さまのご参加をお待ちしております。

CRJ会長 高橋 清

「創世記1章の理解」 高橋 清

聖書全体の土台として、創造の7日間を取り上げます。聖書の個所としては、創世記1章1節～2章4節前半までの記事です。この記事の解釈については、4つくらいの見解に分かれます。

(1)1日＝1時代説 (2)断絶説(間隙説) (3)枠組み説 (4)創造の工程説

これらの間の簡単な比較を行い、それぞれの説の特徴を明らかにします。次に、創造の工程として理解する説を取り上げ、詳しく見ていきます。それから、具体的に、創世記1章の各節の理解について、創造の工程説の立場から見ていきます。最後に、創世記1章を理解することの重要性を明らかにしたいと思います。



「創世記1～11章を基盤とした創造論教育の重要性」 宮本 武典

進化論を中心に据える神学により、創世記1～11章は非科学的であるとされています。この考え方は、信仰の基盤を揺るがし、信仰の継承の大きな障害となっています。

科学と生物との間で揺れ動いた自らの経験や、理系の娘への信仰の継承、大学での生物学教育の実体験を通して、創世記1～11章が生物学的な事実と矛盾しないどころか、それによって進化論の矛盾や難題を容易に解決できること、そして、進化論こそが荒唐無稽な空想に過ぎないことを伝えることの重要性を解説します。

